

## 『太平記忠臣講釈』の義平について：水滸伝の視点から

著者	周 萍
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	10
ページ	284(65)-258(91)
発行年	2013-03-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022458">http://doi.org/10.15002/00022458</a>

# 『太平記忠臣講釈』の義平について

—水滸伝の視点から—

周 萍

## 一 はじめに

忠臣蔵と水滸伝が相似しているという考え方は、すでに江戸時代から現れていた。しかも、『忠臣水滸伝』を書いた山東京伝のような知識人に限った考えではない。天保初期の作と考えられている初代歌川国貞の「歌舞伎水滸伝 忠臣蔵 国貞双六」（錦絵、二枚続き）では、俳優が扮する『仮名手本忠臣蔵』の人物の肖像が描かれている。この作品の題名に見られるように、忠臣蔵は、歌舞伎水滸伝と呼ばれていた。

戦後、郡司正勝が「忠臣蔵の趣向と水滸伝」というエッセイにおいて、『仮名手本忠臣蔵』に水滸伝を思わせる箇所が所々にあると指摘している。だが、それ以降は、赤穂義士劇と水滸伝の具体的な比較研究はないと言えよう。

本論では、『太平記忠臣講釈』の天川屋義平の成立をめぐる<sup>(1)</sup>講釈『赤穂義士伝』のアマノヤ利兵衛が義平のモデルであることを明らかにした上で、義平と水滸伝の史進の相似に着眼し、『太平記忠臣講釈』と水滸伝の比較考察、および近松半二の経歴に関する調査の結果に基づいて、『太平記忠臣講釈』と水滸伝の関係性について考えていきたい。

## 二 『太平記忠臣講釈』の義平

明和三（一七六六）年十月に『太平記忠臣講釈』は、大坂竹本座で初演された。先行研究で明らかにされているように、『太平記忠臣講釈』は、『仮名手本忠臣蔵』の強い影響を受けている。また、七段目の喜内住家の部分は、『鬼鹿毛無佐志鎧』おにかげむさしあぶみ（二七二三）三段目の片桐源吾のくだりの書き替えであることも知られている。

『太平記忠臣講釈』において、近松半二はそれまでになかった義平像を作り上げた。義平は三段目の塩冶城内、九段目の拷問、十段目の正夢の段、という三つの段に登場している。三段目では、由良之助の本心を知るために、明け渡される前の塩冶城内に入る。そこでは、由良之助が御用金盗みの本当の犯人、すなわち九太夫を成敗し、家中の者と主君の仇討ちを誓う。義平は由良之助から討ち入り用の武具の調達を注文される。また、その場で義平は、伴の由松を由良之助にあずける。九段目では、義士たちのために武具を調達していると疑われて、連行され薬師寺と石堂による取り調べを受ける。継梯子つぎばしを売った二文字屋金房が証人に出るが、義平は売った先を白状しない。結局どんなに薬師寺に拷問されても、伴が拷問で殺されても義平は白状しなかった。十段目では、拷問に疲れ果てた義平は、夢で討ち入りの成功を見る。その時、由良之助より石堂宛の密書を携えて現れた飛脚の平右衛門から、師直を討ち取ったと告げられる。密書を受け取る石堂に斬りかかる薬師寺は、石堂に蹴落とされ、平右衛門に斬られてしまう。

義平は三段目で武具調達を約束し、九段目で武具調達の疑いで投獄される。しかし、近松半二は、武具調達を約束するために義平を塩冶城内へ登場させたが、新たな進展へとつなげる作意が見られない。つまり、三段目で義平を塩冶城内へ登場させて特筆する必要性は特になのである。また、十段目の夢の趣向は、義士達の敵討ちの成功を望む観客の気持ちに代弁しているような設定となっている。これは、民衆の赤穂義士事件に対する認識を語る夢でもある。夢にこれほどの意義をもたせることは、『太平記忠臣講釈』までの忠臣蔵文芸および太平記の塩冶判官のストーリーに見られな

い。『太平記忠臣講釈』には、もう一つ不可解なところがある。それは、『仮名手本忠臣蔵』では義士達に同情的な石堂が、『太平記忠臣講釈』では密かに義士達に通じ、薬師寺を平右衛門に殺させる人物となっている点である。

近松半二はなぜこのように義平を創り上げたのであろうか。この疑問を明らかにするために、まず赤穂義士事件を題材にした文芸作品に登場する義平のパターンを確認しておきたい。

### 三 忠臣蔵ものの義平

#### 1 赤穂義士劇の場合

渥美清太郎は、『系統別戯曲解題』で義平拷問について次のように語っている。

赤穂義士事件に於て、堺の町人天野屋理兵衛が、大石等のために武具を調べ、その罪で奉行所に捕らえられ拷問されても、復讐まで実を吐かなかつたという伝説がある。頗る薄弱な根拠だそうであるが喧伝され、既に「仮名手本忠臣蔵」にも天川屋義平として十段目の主人公となっている。その以前の戯曲に見えないところから考えれば、忠臣蔵から生まれたものかも知れない。

右の傍線部に「仮名手本忠臣蔵」にも天川屋義平として十段目の主人公となっている。その以前の戯曲に見えないところから考えれば、忠臣蔵から生まれたものかも知れない。」という言葉がある。渥美清太郎が言うように、『仮名手本忠臣蔵』以前の赤穂義士劇には義平の話が見られない。赤穂義士劇の年表及び現存する台本などを参考に調べたところ、寛延元（一七四八）年八月に初演された『仮名手本忠臣蔵』の次に、新しい天川屋義平を登場させた赤穂義士劇は、明

和三（一七六六）年に初演された近松半二の『太平記忠臣講釈』であることがわかった。さらに、『太平記忠臣講釈』より以降の赤穂義士劇は、「身代わり」の趣向を義平に取り入れた安永六（一七七七）年の並木五瓶の『日本花赤穂塩竈』をはんはさくしちやうあつうのしおがま除けば、概ね『仮名手本忠臣蔵』と近松半二の作品の趣向を焼き直していることがわかる。この状況は、以降ほとんど変わっていない。ただし、『太平記忠臣講釈』に見られる、三段目に登場する義平、夢の趣向、石堂の変貌などは、『太平記忠臣講釈』より以降の赤穂義士劇にあまり取り入れられていない。

『太平記忠臣講釈』の義平像には、前例に見られない点がある上、義平拷問以外に観客に好かれるところも少なかったようである。では、この『太平記忠臣講釈』の義平と重なる人物は、ほかの文芸作品になかったのであろうか。

## 2 本居宣長の『赤穂義士伝』

今までの研究では、『太平記忠臣講釈』の義平へと繋がる先行作品は、前掲の渥美清太郎の言葉に見られるように、『仮名手本忠臣蔵』であると考えられてきた。しかし、赤穂義士事件は、演劇ばかりではなく、互いに影響し合う講釈、史伝、小説など様々な文芸形態によって伝承されてきたのである。人形浄瑠璃の『太平記忠臣講釈』は、作品名に「講釈」という言葉が付け加えられている。その理由の一つとして考えられるのは、『太平記忠臣講釈』が赤穂義士事件を語る舌耕文芸に関わっていることである。

宝永年間の文芸作品では、すでに「四十七人評判」という講釈の名が見られる。中川桂は、「寄席芸としての話芸―咄と講釈―」という論文において、「宝永七年（二七一〇）年刊の『御入部伽羅女』の挿絵には、落語の前史として著名な米沢彦八の仕物まねのほか、講釈や軽口ばなしが生玉（生国魂）神社の門前に軒を並べて小屋掛けの興行を行っているさまが描かれている。講釈の小屋には『太平記・信長記・四十七人評判』との外題が記されている」と指摘している。<sup>(3)</sup> また、関山和夫は「講釈・説法」<sup>(4)</sup>、今岡謙太郎は「忠臣蔵と舌耕文芸」において、本居宣長が少年時代に記録した講釈「赤

穂義士伝』に言及している。穂義士事件は、古くから舌耕文芸に取り上げられているようである。

延享元年（一七四四）に、本居宣長によって記録された講釈の『赤穂義士伝』は、今のところ、最も古い赤穂義士事件を題材にした講釈の記録であると目されている。この『赤穂義士伝』の内容について調べてみると、興味深い点が多に多いということがわかった。

# ①『太平義臣伝』との関わり

本居宣長の『赤穂義士伝』<sup>(3)</sup>の冒頭に次のような言葉がある。

予、延享元年九月の比より、樹敬寺ニテ實道和尚說法ノ次ニ、播州あこノ城主浅野内匠頭長□の家臣、大いしくらの介藤原のよしを已下ノ家臣、主ノ敵を討シ物語をせられしを、我カ愚耳ニき、しとをりヲ書キシルシをく也

本居宣長が延享元年（一七四四）年九月に聞いた『赤穂義士伝』は、長矩が御馳走役に指名されてから、義士たちが御預の屋敷に受け取られるところまでの内容となっている。所々に「略」、「ワスレ也」とあるが、大筋においては、ほぼ完全な形が残されている。その内容は、享保四（一七一九）年に出版された片島武矩の『太平義臣伝』（別書名『赤城義臣伝』、『赤穂義臣伝』など）に拠るところが多い。

両作品を比べてみると、人物名がほとんど一致している上に、刃傷から義士たちが御預けの屋敷に引き取られるところまでの大筋も同じである。表1は『太平義臣伝』の主要な事項をまとめたものである。『赤穂義士伝』を表1に照らしてみると、『赤穂義士伝』は、主に次の事項において物語性が強められていることがわかった。

表1

	太平義臣伝
刃傷前後	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 浅野長矩は、吉良義央に教えてもらった礼儀作法より、土屋相州正直のご意見に賛同する。</li> <li>● 殿中で、義央に叱責された長矩は、刃傷に及ぶ。</li> <li>● 長矩は、田村武顕へ預けられ、切腹。</li> </ul>
城の明け渡しまで	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 山蜂の怪</li> <li>● 内蔵助から諸士に殉死の血判を突きつける。大野九郎兵衛らは、その場を逃げる。</li> <li>● 大野九郎兵衛は、府庫の金銀の配分を要求する。藩札を買い取る岡島八十右衛門に汚職の濡れ衣を着せようとしたが、岡島に不義士と罵倒され、大野親子は家を棄てて逃げ去る。</li> <li>● 上使の到着。城の明け渡し。</li> </ul>
大学殿の藝州左遷まで	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大野親子は、内蔵助に押収された家財から金三百両を盗む。</li> <li>● 江戸、京の義士等は、復讐のために計らう。</li> <li>● 高田軍兵衛が盟約から離脱。</li> <li>● 萱野三平が自害。</li> <li>● 大学殿のことを案じて、敵討を延引する。</li> <li>● 武林隆重が帰省。</li> <li>● 神崎与五郎が、偵察のため江戸で商家になる。</li> <li>● 内蔵助は、妻子を妻の実家へ預けてから、遊郭を通い、軽女を妾にする。</li> <li>● 杉野次房が、家財を尽くして義士を助ける。</li> <li>● 大学殿の藝州左遷</li> </ul>

<p>討ち入りまで</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 円山会議</li> <li>● 内蔵助は、菊屋弥兵衛に義士等の装束を拵えさせる。</li> <li>● 寺井玄溪が家財を売り義士等を支援する。</li> <li>● 義士等は、親・妻子・兄弟・恋人と別れる。内蔵助は、軽女と別れる。</li> <li>● 大野親子が理由書を書き、家財を受け取る。</li> <li>● 矢頭教兼が、質に入れた衣類を騙し取って、関東へ持って行った。</li> <li>● 堀部安兵衛が剣術の友人から吉良邸の絵図を得る。</li> <li>● 大高源五が、呉服屋新兵衛と号して、茶道の師範山田宗変の弟子になり、宗変とともに吉良邸の茶会に出る。</li> <li>● 横川勘平が、桑門の使いとして吉良邸へ行き、宅内の構造を把握する。</li> <li>● 夜討が決められ、義士等は辞世の歌を詠む。堀部弥兵衛が、雪晴という夢告の句を詠む。</li> </ul>
<p>討ち入りとその後</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 夜討ち</li> <li>● 泉岳寺での焼香</li> <li>● 義士等の伏誅</li> </ul>

- 殿中での悪口↓宿坊の壁替えと畳替え、殿中での装束などの難儀
- 堀部弥兵衛・安兵衛↓江戸で物売り、乞食などに成りすまして、義央の動静を窺う。
- 内蔵助↓遊女の浮船におびたらしい金銀を使う。おかるに豪華な衣裳を着せて、彼女を連れて京中を歩き回る。
- 牛飼の人と喧嘩になり、眉間を割られてしまう。
- 夜討ちの装束↓菊屋弥兵衛に拵えさせるときに、すべての装束に金子十五両を縫い込むようと注文する。
- 武器と装束の運搬↓アマノヤ利兵へに頼む（後で詳述する）



○武林隆重↓親の平右衛門夫婦が、死を以て子に義を勧める。

○軽女↓別れの宴で、切り落とした自分の髪を内蔵助に渡して自害する。

○矢頭教兼の父↓病気のため自害。自分の首を内蔵助のところへ持って行くようと、息子に頼む。

以上のように、『赤穂義士伝』は、『太平義臣伝』を基に脚色した講釈であることがわかる。ただし、『太平義臣伝』は、瑞光院で四十六基の石塔が建てられるところまで書き、その後「大義論」、「浅野家譜」、「大石系譜」、「義士分限」などを添えている。

一方、『赤穂義士伝』は、ほかの戯曲や伝説の内容をも取り入れている。例えば、「タケバヤシ武林たゞ七が親平ヲヤイ左衛門ママ夫婦、死ヲ以テ子ニ義ヲス、メシ事」というところは、正徳三（一七一三）年の紀海音の『鬼鹿毛無佐志鑑』三段目の片桐源吾の事の書き替えであろう。

『太平義臣伝』では、すでに山蜂の怪、金と命を惜しむ大野九兵衛親子、内蔵助の妾の軽女、アマノヤ利兵へなどの事が見られる。以上のような事項は、後に、演劇や『赤穂義士伝』のような講釈に脚色されて行く。『太平義臣伝』は、人口に膾炙する忠臣蔵ものの成立に欠かせない存在である。

## ②『赤穂義士伝』の「アマノヤ利兵へ」

『赤穂義士伝』にあり、『太平義臣伝』にない内容の内の、もともと注目すべきところは、「アマノヤ利兵へ」の登場であろう。『赤穂義士伝』の「アマノヤ利兵へ」の部分を摘要してみる。

○シカルニ、右キノゴトキノフダ武具ヲスルニ、くらノ助コトノ外コトメイワクセラレシガ、計ヲメグラシ。「大坂ノ」大坂

ノサウ<sup>惣</sup>ジク<sup>宿</sup>ラウ<sup>老</sup>アマ<sup>天</sup>ノヤ<sup>野</sup>利兵へト云者ノ所ニイタリ、計ニテ

略計<sup>イノチ</sup>ノシヤウ<sup>ヨウ</sup>、利兵ヘガ命をコイウケテ、カノ装束ノ武具ヲバ御城ノ御用トイツワリテ、コシラヘサセテ玉<sup>ツレ</sup>ヘトタ

ノム、利兵ヘコレヲ<sup>ウケマハリ</sup>承タリ、然シテカノ兵具出来テ大坂ノ御用ト云フエフヲサシ、江戸ヘ下シタリ、コレニヨ

ツテ利兵ヘ、同子息ハ、火水ノセメニ相シカドモハタ<sup>シヤウ</sup>状セズ、未シセザル中ニ、クラノ助ハモハヤ本望<sup>モウ</sup>ヲトゲタ

リ

○ソレヨリ利兵ヘ親<sup>ヲヤコ</sup>子ハ、カヘリテ誠<sup>マコト</sup>ノ者ナリトテ、子息惣<sup>シソク</sup>二郎今アマノ利兵ヘト名ノリテ、松平安藝ノ守殿ニ兵

役ニテ、五百石領ウジテ居ル、トナリ

寛延元（一七四八）年初演の『仮名手本忠臣蔵』に登場する「天川屋義平」の原型が、『赤穂義士伝』の「アマノヤ利兵へ」であることは明らかである。さらに、引用文の傍線部から、『太平記忠臣講釈』の義平拷問は、『赤穂義士伝』に由来していると考えられる。

#### 四 近松半二と「講釈」

本居宣長が記録した『赤穂義士伝』は、義士の個伝の部分を「略……の事」という一言の形で、簡潔に書き記している。そのため、近松半二の『太平記忠臣講釈』とは、詳しく比較することができない。『赤穂義士伝』の内容は不十分なところがあるが、『赤穂義士伝』と『太平記忠臣講釈』を比較してみると、利兵へ・義平の件のほかにも、似ている趣向が見られる。例えば、物語の発端である。両作品はともに上野介（師直）の悪意によって、内匠頭（塩治判官）が殿中の装束を取り違える趣向を設けている。これについては、すでに今岡謙太郎の「忠臣蔵と舌耕文芸」において指摘されている。

『赤穂義士伝』のような講釈は、『太平記忠臣講釈』に影響を与えたに相違ない。

『太平記忠臣講釈』の名題に「講釈」という言葉が用いられている点が興味深いところである。江戸時代の演劇作品の名題で初めて「講釈」という言葉が用いられている作品は、近松半二の『太平記忠臣講釈』である。それ以降、亀山の敵討、伊達騒動、伊賀越などの狂言名題にも「講釈」が見られるが、名題に「講釈」のある狂言はほとんどが赤穂義士劇である。『太平記忠臣講釈』という名題は、「太平記」と「講釈」があり、太平記読みに由来すると思われるのである。しかし、『太平義臣伝』や『赤穂義士伝』などの存在を考えれば、名題にある言葉の「太平記」は作品の世界、「講釈」は内容が赤穂義士事件を題材にした古耕文芸に拠ることを指していると考えられる。

ちなみに、近松半二の父、儒学者の穂積以貫は、『太平義臣伝』の出版に関わっている。享保四（一七一九）年春、以貫は片島深渕子（こと片島武矩）著の『太平義臣伝』に序を送っている。漢文で書かれた序では、中国の有名な義士を挙げた後に、次のような言葉を述べている。

皇和元祿年間義士復讐之挙則中華之所闕

此方開国之後數千百年之久未之前聞也吁

昭代右文之餘烈下被草野布衣韋帶之賤其節操如此非亦我國之榮邪

以貫はこの序で、中国の忠臣に、赤穂の義に比較すべきものがないと言う。短文ではあるが、儒学者としての認識をはつきりと示していると言えよう。赤穂義士の伝奇として出版された『太平義臣伝』は、享保五年に禁書となったが、残された版木を使って、慶応四（一八六八）年に『赤城義臣伝』と改題され、補刻版として刊行されたこともあり、また写本として流布の広いものである。なお、著者の片島武矩も、「一種の講釈師と見てよいかも知れない」<sup>(8)</sup>。

『太平記忠臣講釈』の天川屋義平は、講釈『赤穂義士伝』に登場するアマノヤ利兵へがモデルであるに相違ない。また、『太平義臣伝』では、討ち入りの前夜に、堀部安兵衛の父こと堀部弥兵衛が雪晴れの夢を見たという箇所がある(表1)。これをヒントに、『太平記忠臣講釈』は、義平の討ち入りの夢を創作した可能性がある。とはいえ、前述した疑問点、すなわち『太平記忠臣講釈』三段目に義平を登場させることと、十段目で夢に大きな意義を持たせること、ならびに石堂の変貌を設けることの理由については、答えが得られたとはいえない。

アマノヤ利兵へ以外に『太平記忠臣講釈』の義平と重なる人物がいなかったのであろうか。『太平記忠臣講釈』と他の作品との比較の中で、意外な作品に義平に相似する人物がいることに気がついた。その人物とは、水滸伝に登場する九紋龍史進である。

## 五 水滸伝の史進

水滸伝の九紋龍史進は、梁山泊第二十三位につく豪傑である。豪農の息子で、体に九匹の青龍の刺青があることから、人々に九紋龍と呼ばれている。緑林の義賊との親交が厚いが、身内に裏切られ義賊との関係が役所にはれて、官兵に屋敷を取り囲まれてしまう。家中を連れて義賊たちがいるところへ逃げのびるが、賊になることを拒む。師の王進を探す旅に出たが果たせず、義賊たちのところへ戻り大將になる。後に、宋江に従い朝廷に帰順し戦で戦死する。その戦功によって朝廷から忠武郎という称号を与えられた。

義平と重なっていると考えられるのは、百八人の豪傑が梁山泊で勢揃いするまでの三箇所である。すなわち、百二十回本の場合、第二回と第三回の冒頭、並びに第六十九回に登場する史進のストーリーに、『太平記忠臣講釈』の義平に通じるところがある。

## ○第二回、第三回冒頭

十八、九歳の史進は、武芸に優れ、近くの少華山の義賊の陳達、朱武、楊春らと親交を結んでいる。ある日、史進は義賊たちを月見の宴に招待しようと、史家の策士王四を使者として少華山へ行かせた。しかし、その王四は屋敷へ帰る途中で義賊より史進への密書を紛失してしまう。しかも、屋敷に帰った王四は、書状がないと史進に嘘をつく。そして、月見の宴の時、王四から密書を盗んだ史家村の狩人李吉の通報によって官兵に屋敷を取り囲まれてしまう。史進は、冷静に家財を家中の者に分け与え、王四と李吉を成敗し、付いてくる家中を連れて義賊たちと一緒に戦いながら少華山へ逃げのびる。後に、家中を義賊たちに預けて、師の王進を探す旅に出る。

## ○第六十九回

東平府攻めの時、内応のため史進は城内に入り込む。昔なじみの李瑞蘭の家に泊まりに行ったが、李瑞蘭の父親に通報されて捕まってしまう。東平府太守程萬里と、兵馬都監董平の二人が史進を拷問する。白状しなかった史進は、牢に入れられた。顧大嫂が牢内に送り込まれ、東平府攻めの日に牢破りを実行するようにと伝えられる。しかし、牢役人が日付を勘違いしていたため、史進は一日早く暴れ出し、応援のないまま牢に立てこもることになる。一方、宋江に感化された兵馬都監董平が、梁山泊軍に協力したため、東平府は宋江らに攻め落とされる。東平府に入ると、董平が程太守を殺し、宋江が史進を救出する。

水滸伝に登場する史進は、水滸伝において象徴的な意味を持っている。つまり、信じるものを見失い、仕方なく義賊に変身し、宋江に従い救いのない朝廷のために戦死してしまう、という水滸伝の義賊たちが辿る悲劇的な運命を示しているのである。一方、『太平記忠臣講釈』の義平は、史進と違い、忠臣蔵物における庶民の代弁者という立場にある。二

人の人物像は異なっているが、ストーリーにおいて重なる部分が見られる。

## 六 『太平記忠臣講釈』と水滸伝の相似

### 1 義平と史進のストーリーにおける類似

水滸伝の史進と『太平記忠臣講釈』の義平のストーリーにある類似点を次のようにまとめてみた。主に六点ある。

①義士（賊）との金銭面における付き合い 豪農史家の跡継ぎである史進は、お金に困ったことがない。史進と義賊たちの付き合いは、ほとんど金品の授受であった。これに対して、『太平記忠臣講釈』三段目で「奥へ踏ん込み金の催促」という台詞を言う義平も、金銭面において義士たちと付き合い合っている。

②裏切り者を成敗すること 屋敷を手放す前に、史進が裏切り者の王四と李吉を成敗し、家中たちを連れて少華山へ行く。これに対して、『太平記忠臣講釈』では、由良之助が、塩冶の城を明け渡す前に、かねてから師直と内通している九太夫を切腹まで追い詰め、義士たちと主君の仇討ちを誓う。

③やむを得ず屋敷を失うこと 義賊たちとの義を重んじる史進は、やむを得ず自分の屋敷を失った。一方、塩冶家御用の商人である義平は、塩冶家を取りつぶされると、義士たちとともに城を失うことになる。

④義士（賊）に身内を預けること 少華山に逃げのびた史進は、家中たちを義賊に預け、師の王進を探す旅に出る。一方、武器の調達を受諾する義平は、志の証として息子を由良之助に預ける。

⑤投獄と拷問されること 密告されて東平府に捕まった史進は取り調べを受け、どんなに拷問を受けても、東平府攻めの計画を言わなかった。これに対して、義平は、取り調べの場で、二文字金房が証人として出てくるが、継

梯子を売った先を白状しない。

⑥董平と石堂のこと 史進を取り調べたのは、東平府太守程萬里と、兵馬都監董平の二人である。董平は後に梁山泊軍に味方することになり、東平府が攻め落とされた際に、太守の程萬里を殺した。これに対して、義平を取り調べたのは薬師寺と石堂の二人である。由良之助と通じている石堂は、平右衛門から師直を討ち取ったと告げられると、かかってくる薬師寺を蹴飛ばし、平右衛門に殺させた。

右に挙げた六点からわかるように、『太平記忠臣講釈』の義平及び彼が登場する段に、水滸伝の史進及び彼が登場する回につながるところが実に多い。これに限らず、『太平記忠臣講釈』の全体的な構成においても、水滸伝と相似するところもある。

## 2 構成における相似

両作品の構成を表2にまとめみた。水滸伝は、「発端―導入―身内の佞人を成敗する・屋敷を失う―列伝―拷問―城攻め―役人を成敗する―集結―夢」という構成をしている。水滸伝と『太平記忠臣講釈』の構成を比べてみると、『太平記忠臣講釈』の展開も導入、身内の佞人を成敗する・屋敷を失う、列伝、拷問、城攻め、役人を成敗する、夢という展開になっている。『太平記忠臣講釈』と水滸伝は、物語の展開の構図において相似が認められる。

ここまでは、義平と史進のストーリーの類似を比較してきた。ここからは、導入部と結末について比較してみる。

### ① 導入について

『太平記忠臣講釈』の発端は、『赤穂義士伝』の発端の書き替えである。『赤穂義士伝』では、内匠頭は、進物を上野介

表2

(水滸伝順)		水滸伝		太平記忠臣講釈	
発端	〔楔子〕 靈魂の飛び立つ。			〔一〕 公然の場で師直が塩冶を罵る。	
導入	〔二〕 公然の場で高俣が王進を罵る。			〔二〕 公然の場で師直が塩冶を罵る。	
身内の佞人を成敗する・屋敷を失う	〔二〕・〔三〕 (冒頭) 王四・李吉を成敗する。史進は、忠僕を連れて屋敷を棄て少華山へ行き、また忠僕と家財を義賊に預ける。			〔三〕 九太夫を成敗する。由良之助は、義士たちと主君の仇討ちを誓う。義平は、息子を由良之助に預ける。	
列伝	董平、張清以外の百六人の豪傑の登場			勘平、縫殿之助、矢間重太郎、寺岡平右衛門などの義士銘々伝	
拷問	〔六九〕 史進拷問			〔九〕 義平拷問	
城攻め	〔六九〕 東平府攻め。〔七〇〕 東昌府攻め。何れも成功する。			〔十〕 師直館への討ち入りが成功する。	
役人を成敗する	〔六九〕 董平が東平府太守程萬里を成敗する。			〔十〕 石堂・平右衛門が薬師寺を成敗する。	
集結	〔七二〕 梁山泊で勢揃いし、法事が行われる。			※「光明寺の場」がない。「是より直ぐに光明寺へ赴亡君の御石キ碑へ皆々焼香く」という由良之助の言葉がある。	
夢	〔金聖嘆本七〇〕 廬俊義の悪夢 〔百回本一〇〇〕 宋徽宗の夢 〔百二十回本一二〇〕 宋徽宗の夢			〔十〕 義平の正夢	



に贈らなかつたため、勅使の宿坊の壁の上塗り、畳の表替え、および殿中の服装などにおいて、悉く上野介に恥をかかせられた。ただし、上野介の行為は、すべて陰湿ないじめであり、内匠頭に向かつて罵ったりすることがなかった。『太平記忠臣講釈』では、『太平義臣伝』のように、群臣の前で師直が塩冶判官を罵ることになっている。

『太平記忠臣講釈』の冒頭にある薬師寺と師直の会話によれば、かねてから仁義立ての塩冶が氣にくわず、師直に指図を乞うための塩冶からの賄賂も少なかったゆえ、勅使饗応の場で塩冶に恥をかかせることにしたのである。このような策略により、服装について師直の指示が得られなかった塩冶は、取り違えた服装を着替えるため、立派に御馳走の役を勤められなかった上に、群臣の前で師直と薬師寺に催促されたり、「愚鈍者」や「馬鹿」と罵られたりされることになる。塩冶は、ついに堪えかね師直に切りかかってしまう。

一方、水滸伝第一回では、封じ込められた豪傑たちの魂が飛び立つことがある。これは発端としてよく知られているが、水滸伝の直接の始まりではないので、第二回にもう一つの導入部を設けている。すなわち、王進の都脱出である。王進とは、都の近衛兵に武術を指南する教頭を勤めている人物である。いつもは、殿帥府という軍事役所に出仕する王進だが、病氣のためしばらく出仕していない。その間に、佞臣高球が殿帥府の長官に任ぜられた。高球の初出仕に合わせて、殿帥府に勤める官僚が勢揃いする中、王進一人だけが欠席している。かねて武芸で王進の父に負けたこともあり、高球は大いに怒る。殿帥府に呼び出された王進に向かって、高球は、王進とその亡父のことを散々に侮辱する。やつこのことで自宅に帰った王進は、迫害を恐れて、老母を連れて都を脱出した。その後、史家の屋敷に泊まったことがきっかけで、史進の師になった。

ちなみに、水滸伝は、物語の展開に直接関わっていない発端と、物語の本文の導入を別々に設けているが、靈魂が飛び立つという発端をなくしても、物語自体の成立に支障を招くことはない。発端に比べて、水滸伝本文の導入部である「王進の都脱出」は、佞臣が忠臣を滅ぼすという水滸伝を貫く主題の現れであり、水滸伝に欠くことのできない本当の発

端であると言える。

『太平記忠臣講釈』の発端と、水滸伝本文の導入は、佞臣が公然の場で忠臣を侮辱し滅ぼすという主題の現れであり、同工異曲の趣である。

## ② 結末について

『太平記忠臣講釈』の結末となる十段目では、まず、討ち入りの場が演じられた。「是より直くに光明寺へ赴亡君んの御石碑皆々焼香く」（『近松半二浄瑠璃集（二）国書刊行会』）という由良之助の言葉に従い、義士たちが光明寺へ行くところで、舞台は白洲へと変わる。そこで、正夢から目覚めた義平の前に、平右衛門が登場し師直を討ち取ったと告げる。その後、薬師寺は石堂と平右衛門に殺され、義平は晴れて出牢する。

これに対して、水滸伝の結末は、百回本と百二十回本に共通する結末と、七十回本の結末の二種類がある。百回本と百二十回本の場合は、皇帝が宋江らの死を夢で知り、宋江等を祀る廟を建立するという結末である。百回本と百二十回本水滸伝の第七十一回では、東平府と東昌府攻めに成功した後に、百八人の豪傑は梁山泊に勢揃いし、百八人の無事と、朝廷への帰順と、戦死した頭領晁蓋の冥福を祈る法事が行われる。法事の最中に現れた天書には百八人の豪傑の名前とあだ名、並びに星名が記されている。金聖嘆が編集する七十回本では、法事が行われた夜に、盧俊義は百八人の豪傑が朝廷に処刑される悪夢を見するという趣向を付け加え、物語を強引に終わらせた。

水滸伝の皇帝の夢によって宋江の死が報われる結末に比べて、七十回本の結末である盧俊義の悪夢は朝廷や宋江に対する不信が顕わにされている。一方義平の夢は、それまでに築かれてきた価値観に対する肯定と信心を物語り、義士に対する不信がない。人々に理解されることによって義士たちの死が報われることにおいては、『太平記忠臣講釈』の夢は、百回本及び百二十回本水滸伝の結末の夢に近い。しかし、史進と義平の相似から考えると、『太平記忠臣講釈』と金聖嘆

本水滸伝は、ともに拷問、討ち入り、集合、夢という骨組みを持ち、より近い構成で繋がっている。

義平と史進のストーリー、及び『太平記忠臣講釈』と水滸伝の構成をそれぞれ比較してみれば、前に提起した疑問、すなわち『太平記忠臣講釈』が三段目で義平を登場させ、十段目で夢の特写と石堂の変貌を設けた理由は、水滸伝、特に史進のストーリーを『太平記忠臣講釈』に取り入れ、天川屋義平という人物に新しい工夫を加えることにあった、と考えられる。

もし『太平記忠臣講釈』を構想する近松半二の脳裏に、水滸伝があつたとすれば、近松半二は水滸伝を読んでいたことになる。では、近松半二と水滸伝の接触はあつたのであろうか。

## 七 近松半二と水滸伝

### 1 近松半二の時代の水滸伝

『太平記忠臣講釈』が創作された明和三年の時点で、日本では和刻本『忠義水滸伝』、翻訳本『通俗忠義水滸伝』、講義記録式の注釈書『水滸全伝訳解』、『忠義水滸伝解』が存在している。

岡嶋冠山が訓点を付けたと伝えられている『忠義水滸伝』は、享保十三（一七二八）年の初集（林九兵衛）と宝暦九（一七五九）年の二集（林九兵衛・林権兵衛）で途絶えている。内容は水滸伝第二十回までに相当する。翻訳本の『通俗忠義水滸伝』は、水滸伝第三十一回までに相当する宝暦七（一七五七）年の上編（林九兵衛等四つの書肆）しか刊行されていない。京都で刊行されたこれらの和刻本、通俗本は、百回本水滸伝を底本にしていると考えられている。

注釈書『水滸全伝訳解』は、播磨の人岡白駒の水滸伝講義を記録したものである。良斎（こんさい）という人が筆写したもので、最後に享保十二年三月と記されている。この注釈書は第一回より第百二十回まで、水滸伝に現れる言葉を

出てくる順に解説している。また、宝暦七年に陶山南濤の水滸伝講義を記録した『忠義水滸伝解』は京都で刊行された。テキストは百二十回本で、水滸伝第十六回で終わっている。

以上のように、近松半二が生きていた時代の関西地方では、水滸伝の百回本と百二十回本が漢学者たちによく知られていたようである。同じ時代の中国では、金聖嘆編集の七十回本水滸伝が主流となっている。百回本と百二十回本に比べて、七十回本は金聖嘆によって強引に終わらされている上に、詩文もかなり削られている。関西の漢学者たちが、わざわざ古い百回本と百二十回本を選んで学習していたのは、このような七十回本の内容について知っていたからだと考えられる。

## 2 近松半二と水滸伝の接点

『太平記忠臣講釈』と水滸伝の構成が似ているとは言え、作者の近松半二には、当時水滸伝との接点があったのであるうか。

享保十(一七二五)年、近松半二は儒学者穂積以貫の次男(穂積成章)として播磨姫路に生まれる。浄瑠璃作者を目指して、若い時から二代目竹田出雲の門人となった。宝暦元(一七五一)年十月、竹田外記の下で、「役行者大峯桜」を執筆したのが最初で、以後衰退期の人形浄瑠璃を支える作者として奮闘し、天明三(一七八三)年に京都山科で死去した。晩年の随筆に「我元来生れ付たる不器用ものにて、何を稽古して見ても埒明ず、そのくせ根弱く二三日の中に退屈して捨ててしまふゆへ、ついに何一つ覚たる事なし。所詮行ぬこと、観念してそれより物習ふ事を止て」(『独判断』<sup>9</sup>)と述べられているように、近松半二は、算法家の祖父与信と、儒学者の父以貫、並びに儒学者の兄安章が歩む学問の道に馴染まなかった。これが原因で、父以貫と縁の深かった演劇界に惹かれて、浄瑠璃作者の道を選んだと推測される。

近松半二の作品には、直接白話小説の趣向を取り入れた作品は、ほとんどない。直接白話小説の趣向を取り入れた可

能性がもつとも高い作品は、宝暦二（一七五二）年五月の大坂竹本座で上演された人形浄瑠璃『世話言漢楚軍談』である。作者は竹田外記、三好松洛、近松半二、中邑閼助、吉田冠子となっている。この作品は、『史記』をはじめ多くの中国の史書に記録されている項羽と劉邦の戦いに関する史実を題材にしている。作品には鴻門の会、樊噲門破り、韓信の股潜りなどの人口に膾炙する名場面が見られる。しかし、『世話言漢楚軍談』の創作に関与した漢籍については、いまだに明らかにされていない。白話小説『西漢通俗演義』（甄偉撰、明萬曆）の翻訳本、すなわち読本の『通俗漢楚軍談』（元禄八（一六九五）刊）に拠るものではないか、と考えられている<sup>(9)</sup>。また、仮に『世話言漢楚軍談』が白話小説の『西漢通俗演義』と関わっていたとしても、立作者が近松半二ではないので、半二が作品全体の構想にどの程度で関与したのか、判断しがたい。『世話言漢楚軍談』は、中国歴史の逸話を人形浄瑠璃で演劇化した点において、珍しい作品ではあるが、あまり再演されていなかったようである<sup>(10)</sup>。

ほかに、白話小説ではないが、『昔男春日野小町』や『本朝廿四孝』に中国の故事『廿四孝』の趣向が取り入れられた事例が見られる。しかし、二作品とも近松門左衛門の先行作品を経由して取り入れられている。

漢籍から趣向を取り入れた近松半二の作品が少ないのは、事実である。しかし、半二は、衰退期の人形浄瑠璃を支える演劇家として、人形浄瑠璃の再興のために、新しい工夫を人形浄瑠璃作品に取り入れなければならなかった。半二の努力はその作風にも現れている。半二の作品は、「構想の雄大と複雑、推理小説のような筋の展開、歌舞伎的なせりふの多用」（『演劇百科大事典』平凡社）などと評されている。これは、先人の演劇や古典文芸作品に通暁し、その養分を吸収しているからこそできたことではなからうか。

では、半二の作品に漢籍を摂取しているところが全くないのであるか。半二の家庭環境から考えれば、彼は漢籍についてよく知っていたと考えられる。水滸伝に関しては、特に可能性が高い。

半二の父穂積以貫は、近松門左衛門や竹田出雲家と深い関係にある儒学者として知られている。さらに、大衆文芸を

好む穂積以貫は水滸伝に関しても、赤穂義士事件に関しても強い関心を抱いていた。

以貫が水滸伝に興味を抱いたのは、伊藤東涯の古義堂による影響が大きいと考えられる。中村幸彦の「穂積以貫年譜略」によれば、以貫は「正徳四年甲午（二十三才）九月廿七日、伊藤東涯の古義堂に入門」し、約三年後の享保二（一七一七）年に古義堂を辞して大坂へ移居したと言う。<sup>(12)</sup>古義堂は伊藤仁斎の代から中国の俗文学・白話小説に対する関心が高かった。これについて野々村勝英が次のように述べている。<sup>(13)</sup>

仁斎の日記によれば、仁斎は天和三年、五十七歳の時、明代の通俗短編小説集の、いわゆる「三言二拍」（『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』及び『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』）の中『醒世恒言』を読んでおり、東涯も『名物六帖』の編纂に際して、『水滸伝』『竜図公案』『西湖佳話』『拍案驚奇』などの俗文学書博搜<sup>マ</sup>している。

東涯の中国の俗文学に対する関心について、中村幸彦の「古義堂の小説家達」<sup>(14)</sup>にも詳述がある。

古義堂という環境の中で、東涯の門下から白話小説や唐音に通じた学者が多く出た。その中でもっとも水滸伝に詳しくかったのは陶山南涛である。享保二年古義堂に入門した南涛は、古義堂門の松室松峽・朝枝玖珂に中国語を学び、さらに徂徠門の田中大観に水滸伝の講義を受けた。宝暦七（一七五七）年に刊行された南涛の『忠義水滸伝解』によれば、南涛は享保十二三年ごろから宝暦七年までの三十年の間に水滸伝を講じ続けていたようである。

南涛の水滸伝研究に及ばないが、古義堂門下で水滸伝に興味を抱いていた穂積以貫も注釈書の『忠義水滸伝抄解』（写本。別名『忠義水滸伝語解』）を編集していた。<sup>(15)</sup>『唐話辞書類集』第十三集に収録されている『忠義水滸伝語解』の巻首の二、三行に「長崎 半唐師 口授」「大坂 以貫 筆受」とあるので、この写本は、長崎出身で唐話に通じる人物が開いた水滸伝の講義を受けた以貫が、講義を記録したものであるとわかる。その内容は水滸伝第一回から第五十二回までの語句

の解釈ではあるが、儒学者の以貫にとつては、わからない言葉が少なかつたようで、解釈のない回もある。以貫は水滸伝を教授するほどの専門家ではないが、水滸伝について熟知していたに相違ない。

さらに、前述したように、以貫は赤穂義士事件に対しても関心を持っていた。享保四（一七一九）年春刊行の片島武矩の『太平義臣伝』に序を贈っていることから、以貫の赤穂義士事件に対する関心の度合がうかがえる。

以上のように、半二の父穂積以貫は、『太平義臣伝』とも水滸伝ともつながりのある人物と言える。このような父の許で育った近松半二は、知らず知らずにその影響を受けた可能性がある。加えて、『太平記忠臣講釈』が創作された明和三（二七六六）年に、穂積以貫はまだ健在しているので、漢籍のことをめぐって、半二が以貫に相談していたとしても不思議ではない。

なお、前掲した『独判断』の引用に見られる「我元来生れ付たる不器用ものにて、何を稽古して見ても埒明ず」という半二の言葉は、半二は算法家の祖父と、儒学者の父を持つており、演劇作者の道に入る前に、儒学や数学などの学問の基礎について学んでいたと考えられ、それを踏まえたものであると思われる。また、『独判断』には、業成就しなかつた儒学へのコンプレックスが処々に見え、「仁斎の語孟字義に……」などとも見える」と、中村幸彦が言う。

東涯の一子東所の『初見帳』は天明八年四月に初つたもの一冊と、別に巻頭に「東所先生初見帳、家有先生手書初見帳、天明戊申歳え煥子災、因追録之自寛保延享年中至天明八年戊申歳」として、東所の男東里が書いたもの一冊がある。その後者の中に、「穂積伊作 大坂」なる人物が見える。この「伊作」は何人か。安章が伊助を称した後の、この伊助の記憶違いとすれば、以貫は、一子をも古義堂に入門させたこととなる。『伝記作書』拾遺中の巻には「半二は穂積伊助と云也」とあるが、穂積家の次男が、伊助を称するのは少しおかしいようで、この伊作が半二であろうか。『独判断』には、業成就しなかつた儒学へのコンプレックスは処々に見え、「仁斎の語孟字義に……」などとも見える。



半二も一度は古義堂の門戸を叩いたか、それとも父兄の家業についたか。半二の儒学も古義堂であつたに相違ない。

中村幸彦「穂積以貫逸事」

半二が勉強していた儒学は、やはり古義学に相違ない。古義学と言えは、中国語の学習が不可欠である。父以貫ほどの語学力を持っていなかったとしても、半二が中国語を勉強していたことは、十分考えられる。そうなれば、父以貫の助力を得ながら、半二が水滸伝を読んでいた可能性が全くないとは断言できない。

ちなみに、赤穂義士事件を題材にした舌耕文芸は、史実をわかりやすくおもしろく語り、通俗化にしている。これに対して、水滸伝と言えは、まさに史実を語る講談の脚本で綴られた小説である。『太平記忠臣講釈』の「講釈」は、『赤穂義士伝』を作品に取り入れていることを指していると思われるが、史実を語り物として通俗化している点においては、水滸伝という小説とも通じている。

何れにせよ、近松半二は、家庭環境の中で水滸伝に接していたと考えるほうが無難であろう。

## 八 おわり

図1は、山東京伝の『忠臣水滸伝』前編(二七九九)の口絵にある義平である。絵に見られるように『忠臣水滸伝』の義平には史進のイメージが使われている。しかし、京伝は史進のエピソードを義平に取り入れていない。『忠臣水滸伝』のほかの主要人物には見られない描き方である。なぜ京伝は義平に史進の姿が重なって見えたのであろうか。『太平記忠臣講釈』は、『忠臣水滸伝』に影響を与えた作品の一つだと、すでに野口隆が指摘している。<sup>16)</sup>京伝は『太平記忠臣講釈』の義平に水滸伝の史進が見えたからこそ、『忠臣水滸伝』の義平に史進のイメージを使つたのではなからうか。



『太平記忠臣講釈』に登場する天川屋義平は、講釈『赤穂義士伝』のアマノヤ利兵へに由来している。『赤穂義士伝』は、樹敬寺で実道和尚が説法のついでに語った内容を、その場にいた十五歳の本居宣長が記録したものである。この講釈は、写本として流布の広い片島武矩の『太平義臣伝』を基に、戯曲や伝説の内容を取り入れておそらく脚色し語られていた。その内容のほとんどは、市井の人々によく知られていたと推測できる。『太平記忠臣講釈』は、創作された当時、『赤穂義士伝』も『仮名手本忠臣蔵』も存在していたため、よりおもしろい赤穂義士劇を作るための新しい工夫が必要であったと考えられる。その新しい工夫の創作においては、水滸伝、特に史進の事が天川屋義平のストーリーに取り入れられた可能性がある。

忠臣蔵と水滸伝が相似するようになった背景は、一体何であったのか。この疑問を明らかにするには、赤穂義士事件の歴史や思想的背景を考慮すると同時に、同事件を題材にした文芸作品群すなわち忠臣蔵ものの生成に関係する事象を研究視野に入れることも必要である。『太平記忠臣講釈』と水滸伝の比較研究は、試みの一つであり、本論を近松半二の創作法を吟味するための一説として記しておきたい。



図1 『忠臣水滸伝』前編口絵（『山東京伝全集』第一五巻、ペリカン社、平成六年）

注

- (1) 郡司正勝「忠臣蔵の趣向と水滸伝」(『幕間』昭和三十二年十月)
- (2) 本居宣長が記録した講釈「赤穂義士伝」では、「アマノヤ利兵へ」と表記している。
- (3) 中川桂「寄席芸としての話芸」(『芸能伝承の世界』三弥井書店、平成二十一年三月) 今岡謙太郎「忠臣蔵と舌耕文芸」(『仮名手本忠臣蔵を読む』吉川弘文館、平成二〇年八月)
- (4) 関山和夫「講釈・説法」(『説話の言説―口承・書承・媒体―』勉誠社、平成三年九月)
- (5) 『本居宣長全集第二十巻』筑摩書房、昭和五〇年
- (6) 「歌舞伎、浄瑠璃の戯曲構成の要素の一をさす作者用語。創作にあたり、戯曲の背景となる時代、または一定の人物群の類型に対して、こう命名した。作者道では、「世界」を狂言の立筋と説明し、これに対して横筋を「趣向」と名付ける。」(『演劇百科大事典』平凡社)。また、「立筋は世界、横筋は趣向」とは、享和元年の『戯財録』に由来する言葉である。
- (7) 中村幸彦「穂積以貫逸事」(『文学』昭和四八年一月)。なお、『太平義臣伝』の翻刻本は、大正二年に集文館から『赤穂義臣伝』というタイトルで刊行された。
- (8) 中村幸彦「講談」(『日本庶民文化史料集成』第八巻)
- (9) 写本『半二現世安心記』。別本『独判断』天明七年刊。
- (10) 『浄瑠璃作品要説 近松半二篇』国立劇場、昭和五九年
- (11) 『義太夫年表』には、宝暦二年の初演と、安永七年十二月大坂での上演が記載されている。
- (12) 中村幸彦「穂積以貫年譜略」(『日本文学の研究』重友毅博士頌寿記念論文集、昭和四九年七月)
- (13) 野々村勝英「仁斎と古義堂サークル」(『日本学』平成三年五月)
- (14) 中村幸彦「中村幸彦著述集」第七巻、昭和五九年
- (15) 『唐話辞書類集』第十三集、古典研究会編輯、汲古書院、昭和四八年
- (16) 野口隆「『忠臣水滸伝』の演劇的趣向」(『国語国文』平成七年九月)

&lt;ABSTRACT&gt;

## **On Gihei in *Taiheiki Chushin Koshaku*: Through the Position of *the Water Margin***

ZHOU Píng

During the latter Edo period, literature works began to appear which used resemblances between *Chushingura* and *the Water Margin* as materials for structuring or Mitate. In order to explore the background of how these two literatures started to resemble, it is necessary to include events pertinent to the creation of literature works derived from the Ako Gishi Incident or Chushingura-related plays into the scope of research. This study is an attempt as such.

In *Taiheiki Chushin Koshaku* by CHIKAMATSU Hanji, a merchant named AMAGAWAYA Gihei plays a conspicuously active role. The author introduced Gihei in an early scene of the story where people deliberate the evacuation of Enya Castle and closed the piece by setting the scene of “Torture of Gihei” and his dream at the final phase of the story. Similar creations are not observed in previous literatures depicting Ako Gishi. The aim of this study is to clarify the background of Chikamatsu Hanji’s introduction of such a creative method into *Taiheiki Chushin Koshaku*.

For this purpose, I decided to place a focus on “Koshaku” which is seen in the title of *Taiheiki Chushin Koshaku* and conduct research on *Ako Gishi Den*, a Koshaku documented by MOTOORI Norinaga in 1744. As a result, it was clarified that *Ako Gishi Den* was told on the basis of *Taihei Gishin Den* by KATASHIMA Takenori while borrowing contents of dramas and legends. In addition, it also became clear that Amagawaya Gihei was modeled on a person named “AMANOYA Rihei” in *Ako Gishi Den*.

On the other hand, the comparison of *Taiheiki Chushin Koshaku* with other

works made it obvious that there existed a person who had many things in common with Gihei. The person is Shishin who appears in the colloquial version of the *Water Margin* which was written in the script form for Kodan. The comparison of *Taiheiki Chushin Koshaku* with *the Water Margin* clarified that not only stories of Shisin and Gihei resembled but also the structures of both works were partially similar. Moreover, based on the research result of the family environment of Chikamatsu Hanji, I made it clear that he must have had contact with *the Water Margin*.

There is a possibility that *Taiheiki Chushin Koshaku* may have adopted the story of Shisin in *the Water Margin* as a material in creation of the story of Gihei and partially followed *the Water Margin* for its structure. I would like to write down this thesis as one opinion to examine the creation method of Chikamatsu Hanji.